

日本のテキスタイルプリントデザイン黎明期の諸問題 —GHQのデザイン育成政策を中心に—

日本のテキスタイルプリントデザインは、占領期という特異な背景のもと、戦後経済復興の基幹産業となった繊維業界の中で黎明の時を持った。本研究では終戦直後から1950年代半ばまで、その黎明期から隆盛に向かうまでの経緯を追う。特に注目するのは、敗戦という未曾有の混乱の中で、占領を契機とした異文化間あるいは国内的和洋の相克、また伝統と革新との対立や融合の事実と、その様相である。

まず第1部では、戦前に不要不急産業として規制され、敗戦時には壊滅的な被害を被った日本の繊維産業が、平和産業として復興をめざす経緯を、GHQの繊維輸出振興政策から見ていく。数多の困難のなか結果的には大きな成功を掴む過程で、伝統的な日本の繊維産業あるいは意匠デザインがどのように揺らぎ、新たに変容していったのか、その経緯を分析する。

第1章では、占領直後から企画された生糸・絹製品の輸出繊維政策を取り上げる。戦前から世界的に定評があったため大きな期待をもって開始された絹の輸出は予想に反してなかなか進展を見せなかった。低迷する絹貿易や山積する滞貨に対し、米国の関係各省庁やGHQは多くの施策を試みるが、これらの中に、戦後のプリントデザイン誕生に深い影響を与えたGHQ主導の『染織図案サンプルブック』の制作がある。これこそ図案家復興の原点だったと回顧されるものだが、こうした企画の具体的な狙いや経緯は、今ではあまり語られることもなく、関係資料も極めて少ない。本研究では今回発見したGHQ側の新資料を含め、日米双方の資料を解析し、具体的な経緯の実証を行ってプリントデザイン黎明期の出発点の解明をここで試みる。

第2章では、戦中戦後、壊滅的な打撃を受けた綿産業がいかにして日本経済復興を担う基幹産業へと成長していったかという問題を扱う。

絹貿易の失速により本格化した綿の加工貿易は圧倒的な成功をおさめ、日本経済復興の主戦力となっていった。この経緯について経済史の分野で精緻な先行研究があるが、一方でデザイン的な視点からの研究は極めて少ない。この章ではGHQのデザイン育成的なアプローチがこの期の繊維産業の発展にどのような役割を担ったか、またこの産業の成功が黎明期のデザインにどのような影響を残したか、その両面を考察する。

第3章では日本の綿工業の戦後の再登場とその急激な進展が海外市場へ与えた大きな衝撃を考察し、国内繊維業界あるいはデザインへの影響を総括する。

この時期日本の輸出に規制をかける目的で結成された「英米合同綿織物使節」の来日は、非常に複雑な国際関係のなかにある、日本の綿産業の立場を浮き彫りにするものだった。この訪日グループの結成から来日実現までのいきさつを通して、当時の国際的繊維市場の複雑な背景を確認し、またGHQと日本繊維業界の周到な対応策や、日英米会議の具体的内容から、日本繊維産業が置かれた当時の状況や立場の理解を深める。

また当時発展の緒に就いていたプリントデザインに、加工貿易における指図図案が予期せぬ意匠盗用という疑惑を提起した。この意匠盗用問題に関して新出のGHQ関係資料から具体例を示して実態を検証し、その背景と将来への展開を明らかにする。

第1部ではGHQの深い関与によって発展した綿加工貿易、その問題の渦中から育ってきた戦後テキスタイルプリントデザインの萌芽を示し、次の第2部で語る図案家たちの活動を十全に理解していくための基盤となった社会的、経済的背景を明確にした。

第2部では、敗戦という特殊な状況下で、既存の文化がどのような変化を経て、新しい文化を受け入れ発展させていったかという問題を、国内向けプリントデザインにおける和洋の転換という視点から検討する。特に本研究では、今まで繊維業界の動向に埋没しがちだった染織図案家を中心に、繊維産業にとって最も重要といわれるデザイン面から復興の経緯を明らかにする。

まず第4章では、敗戦当初の複雑極まる状況ゆえに、今までほとんど研究対象に取り上げられなかった国内のプリント服地の芽生えを明解に考証する。これが業界の本格的復活の出発点と語り継がれている1949年の第一回京都染色見本市を機に、染織図案家あるいは大手呉服問屋や染工場が、服地専門への転換を目指すこととなるが、この章ではプリント服地市場がまさに誕生するその萌芽を把握する。

第5章では、服地市場の誕生を見た1950年から1952年、奔流のように押し寄せる洋風感覚に足をすくわれ、またその反動のように懐古趣味に走るといふ、極端に新旧に揺れる染織図案家の動揺の足跡を、マチス、ピカソらの西洋抽象絵画への極端な傾倒、あるいは光琳への復古に見る。プリントデザインの黎明期におけるこれら迷走の実際の動向とその意義を検証する。

第6章では服地の爆発的な国内需要を背景に、やがて和洋兼業あるいは服地図案専門に転向する図案家も現れ、一時代を形成して、抽象や幾何柄の綿プリントが大きな飛躍を遂げていく展開を見る。

ここでは特に存在感を発揮した先駆的プリント服地図案家グループ「A」（エース）の活躍について考察を深める。彼らはいかにして革新的に洋装への転換に成功したのか。彼らの作品や具体的な経歴あるいは聞き取り調査の実施でその実像を初めて明らかにする。

いよいよ緒を見たプリント図案もまだまだ西欧の模倣に終始したが、この状況下で本格的なオリジナルデザインへのアプローチが様々なところで研究・実験されていた事実も掘り起こす。

第7章ではGHQその他海外からの日本の伝統的な意匠への期待と積極的な働きかけの意義を確認しつつ、ようやくこれらにも応える形で、日本独自のテキスタイルプリントデザイン創成へと向かう図案家の挑戦を考察する。自国の伝統と向き合い、西洋的感覚も身に付けて、和洋双方からの飛躍を試みる彼らの思いは、1955年春の第10回日本染織図案家連盟展覧会のテーマ「非形象」に結実する。この「新しい創形」への試みは業界的にも予想以上の成果をもたらし、戦後テキスタイルプリントの代名詞となった京プリントを全盛期へと導いた。

長い伝統を持つ日本の意匠が敗戦、占領という形で突如中断され、新しく入ってきた西洋の服飾文化に翻弄されながらも、GHQの持続力を持ったデザイン育成政策を緒に、自らが持っていた特質を復活し開花させ、なおそれを止揚して新しく乗り越えていくという至難の技をこの時期の図案業界は成し遂げたようだ。本研究はこうした復興期の諸相を初めて明らかにするものである。